

図版つき
完全版

日本人の起源

（縄文から紐解く祖先のルーツ）

田中英道

HIDEMICHI TANAKA



DIRECT

高天原は関東にあった

皆さんこんにちは。

この講義では、少し長い歴史の話をしたと思います。今、現代のことばかりを考える人が多くなり、「過去はもう忘れていいのだ」、あるいは「過去というのは、進歩の前ではほとんど考えるに値しないのだ」というような考え方が非常に多くなっています。

このことは、今回のコロナウイルスに対する世界の反応にも大きな影響を及ぼしているのです。

皆さんご存知の通り、コロナウイルスは2002年～2003年に感染爆発を起こしたSARSと同様、中国から発生し、今や世界中で死者30数万人を超える被害になっているのですが、これはわずか100年前に大流行し、全世界で4,000万人から9,000万人の死者を数えた**スペイン風邪**と比べれば、その規模は全く小さなものなのです。

【スペイン風邪】1918年～1920年に流行し、世界中で5億人が感染。(当時の世界人口の4人に1人が感染)4,000万～9,000万人が亡くなったといわれている。第1次世界大戦の真っ最中に流行し終結が早まった。

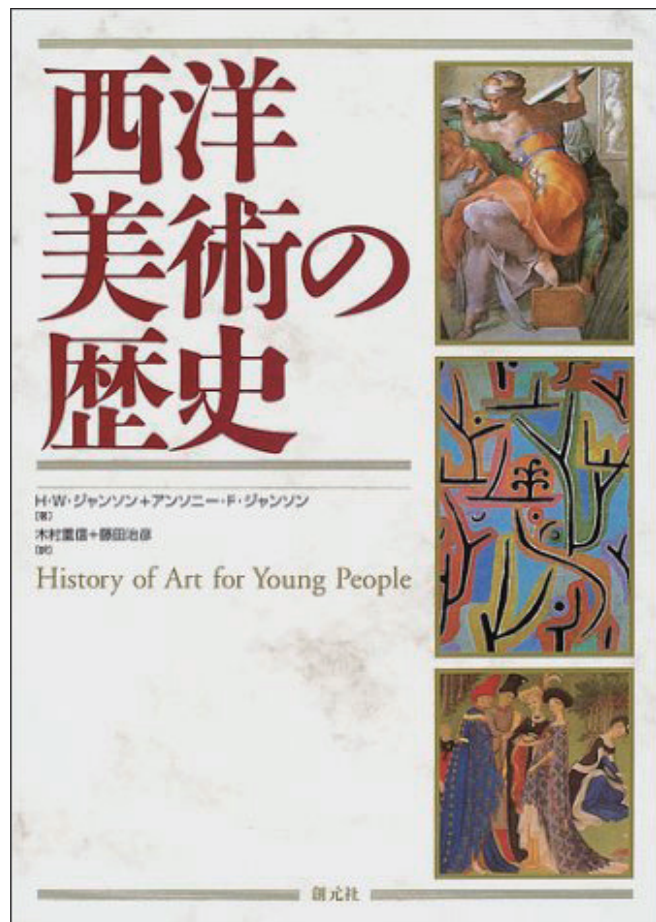
それにもかかわらず、まるで「歴史上初めての経験」のように世界がパニックになっているのですが、それは歴史に対する知識がないためで、この程度のことでパニックになる現代というのは、決して進歩しているとは言えないのではないのでしょうか。

話は変わりますが、今回私は美術史のドクター論文をフランスで書いてまいりました。これまでもフランス、イタリア、ドイツに留学し、ヨーロッパについて理解することができましたが、同時に日本の素晴らしさについても分かったのです。

日本は今まで、世界の美術史の中で不当に扱われてきました。例えば**ジャンソンの『美術の歴史』**では、日本のことにはほとんど触れられていません。同様に、世界の文化史においても日本はほとんど添え物のような存在でした。

それは、日本人が日本の文化をきちんと紹介、あるいは発表していないからなのです。

私はもう78歳になりましたけれども、いまだに現役のつもりです。



『西洋美術の歴史』（創元社 刊、H.W. ジャンソン、アンソニー・F. ジャンソン 著、木村重信、藤田治彦 訳）

大学を辞めて以後、このようなある意味での啓蒙運動をやっているのですが、それは「日本のことをもっと世界に知らせなくてはいけない、皆さんにもその良さを知らせなくてはいけない」ということを私の使命として、この生涯をかけてお話ししたいと思うからなのです。

先ほど述べたような、「現代が一番いいのだ」という戦後の考え方からすれば、「はっきり言って、過去なんてどうでもよい」というものの見方になってしまうのですが、これはとんでもない話です。

皆さんの中を流れている血というのは、日本の原初、縄文の時代から形成されていて、それが皆さんの思考や精神性の中に今も残っているのです。現代では血液検査が非常に発達し、DNAや染色体を分析することで、皆さんがどこからやってきたのか、その起源がすべて分かってきているわけです。

そういう観点から見ても、改めて歴史をわれわれの中に取り返さなくてはいけないのです。

まず注意しなくてはならないのは、西洋人が書いた歴史をそのまま受け売りしてはいけないということです。

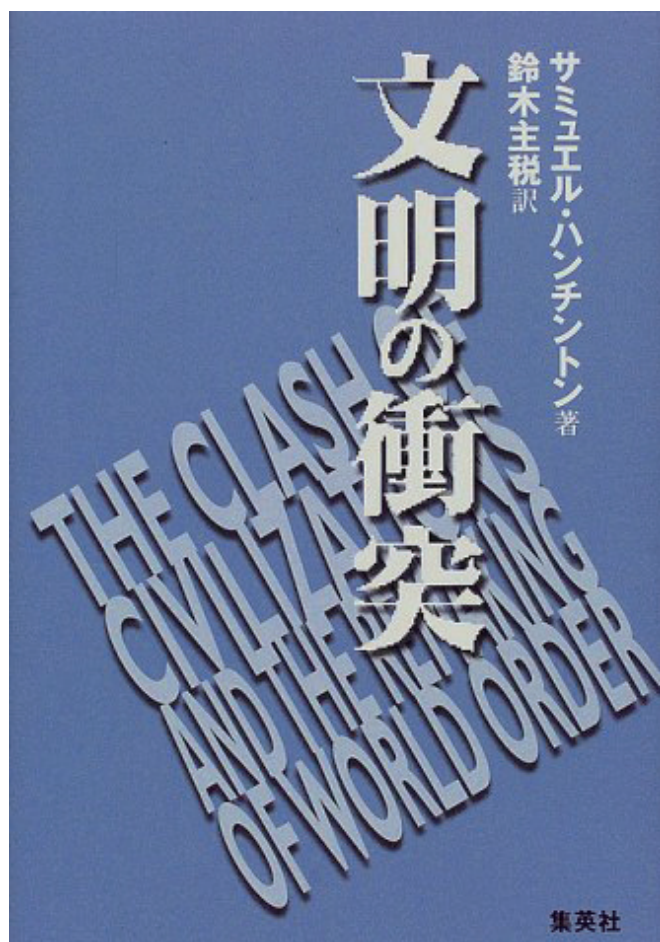
日本人の歴史、日本の歴史というのは日本人にしか分からない部分があり、中途半端な知識だけでは書けないのです。これまでの世界の歴史の中で、日本がほとんど登場しないのはそのためです。

たとえ登場したとしても、「明治以降、日本はアジアの中で珍しく近代化し、そして西洋のまねをして帝国主義になった」などという部分だけが日本の評価につながっているのですが、それは全くの間違いですし、そもそも「帝国主義」という言葉も西洋の造語なのです。

今から25年前、**サミュエル・ハンチントン**という人が『文明の衝突』という本を書きましたが、ここで「**日本は8大文明の独立した1つだ**」ということを言っています。

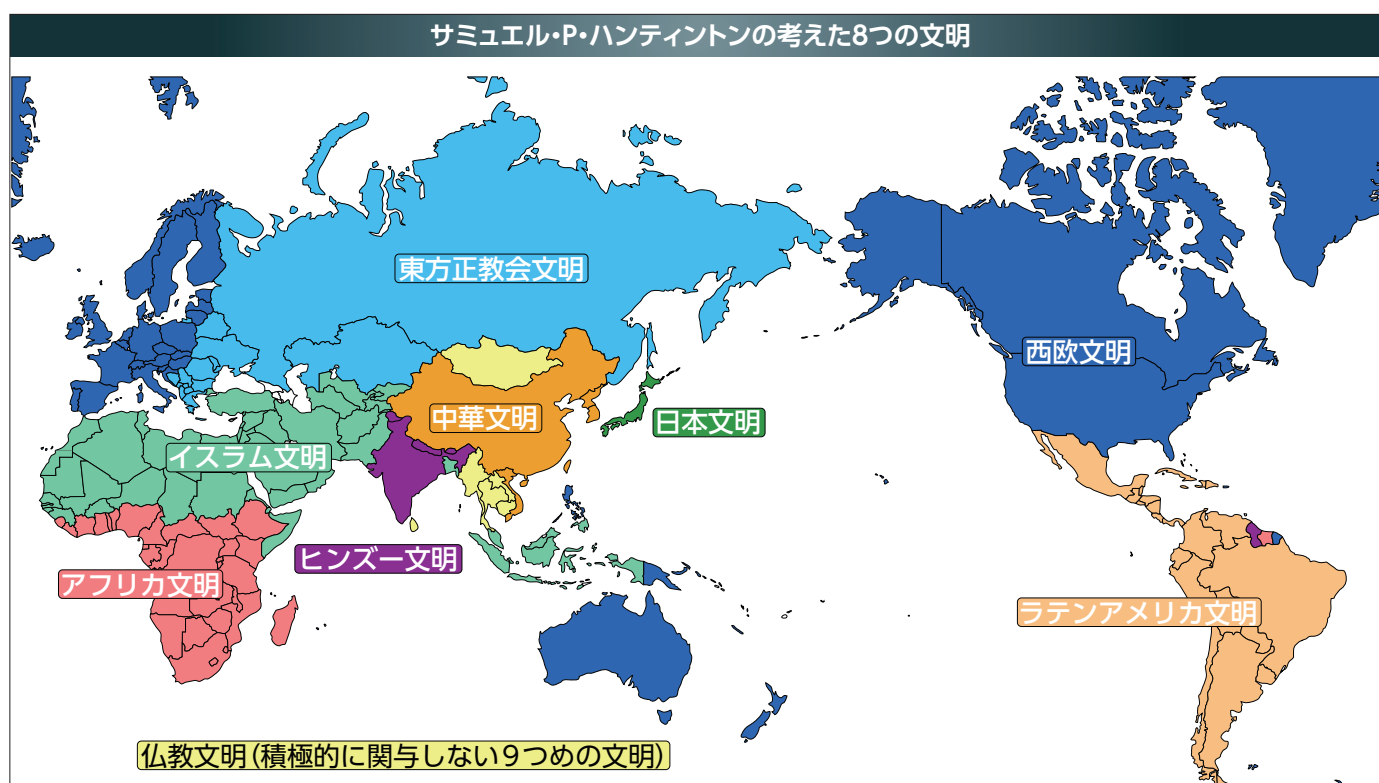
今までは中国や朝鮮、大陸から来た文化を取り入れただけで、ある意味「中国の属国」のように、あるいは「朝鮮からみんな来たのだ」というようなことを言われていたのですが、文化の研究が進歩することにより、これらはすべて間違いだということが分かっています。

またご存知の通り、日本人は朝鮮人や中国人と



『文明の衝突』（集英社 刊、サミュエル・ハンチントン 著、鈴木 主税 訳）

全く違うDNAを持っています。それらのことから、日本が自立した文明を持ち、そのすべてがユニー



クで立派なものであるということを、はっきり認識する必要があるのだと思うのです。

ここでは日本の歴史について、旧石器時代の辺りから語っていきたいと思います。旧石器時代、3万年前などという、皆さんどのようにイメージしていいかわからないかもしれませんが、すでにそのころから日本の文化というものは非常にユニークだったのです。

私はこれまで『**高天原は関東にあった**』『**本当はすごい！ 東京の歴史**』『**日本の起源は日高見国にあった**』というような本を書いています。

私はこれらの本で、日本の神話と考古学とを結合するということを唱えているわけですが、今までは、考古学と神話というのは全く関係のない、別の学問だとされ、それらを結びつけることは一切されていなかったのです。

西洋の歴史の場合、神話との関係は日本のものほど強くはないのですが、それは、西洋では国ができて他の民族によって侵略されたり、民族そのものが移動したりということが多く、定住する民族、あるいは国家というものが少ないからなのです。

フランスにはもともと**ケルト**という民族がいましたが、それ以前はいわゆる最初のホモ・サピエンスと言われる人たち、そして**アルタミラ**や**ラスコー**

の洞窟で壁画を描いていた人たち、**ショーヴェ**の洞窟で壁画を描いていた人たち、これらはすべて違う人たちなのです。

【ケルト人】紀元前1500年～400年のヨーロッパに広く分布したが、ローマやゲルマンに駆逐された。現在はアイルランドとウェールズの主要民族。

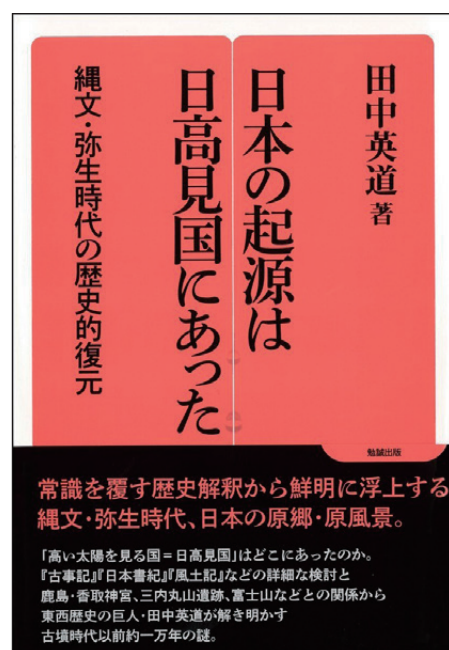
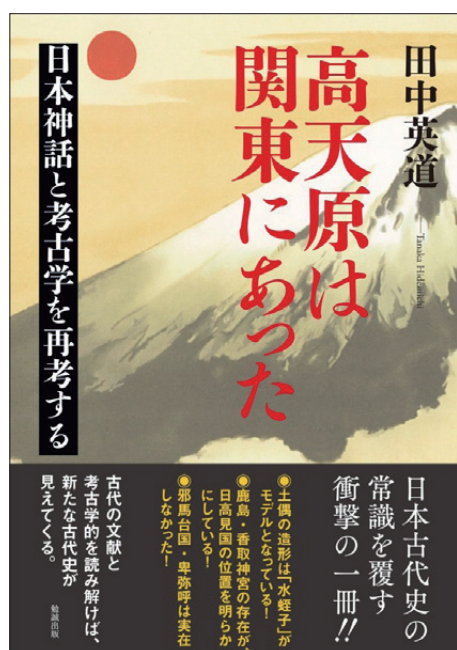
彼らは民族がすべて異なり、そして移動するということがあるのですが、日本の場合、動かず定着していくわけです。そういうことから、やはりわれわれは非常にユニークな民族だということが分かってくるのです。

ご存知の通り、**世界の人類は南西アフリカから発した**ということは定説になっており、これはつまり、日本人も実を言うともともと南西アフリカにいた人だということになります。

南西アフリカから出発し、何世代もかけ長い旅程を経て、徒歩、あるいは船でたどり着いたのが日本だというわけです。

この辺りの研究も今本当に進んでいまして、どのように彼らが移動してきたのかが分かっています。

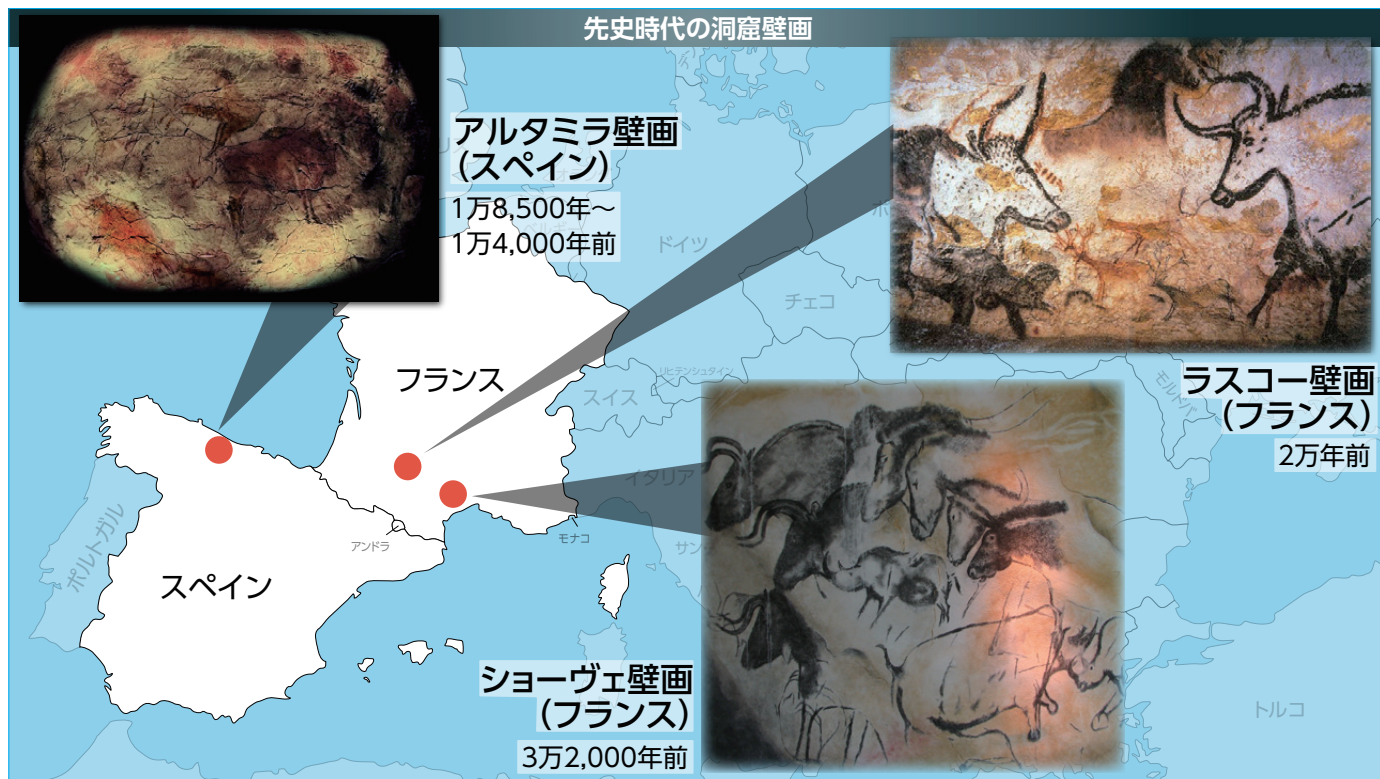
約10万年前から移動が始まり、約6万年前に中近東に移り住み、そしてさらに中国辺りに到達するのは約3万年前なのですが、日本にはもっと早く約4万年前には到達していることが分かっています。



『高天原は関東にあった』（勉誠出版 刊、田中英道 著）

『本当はすごい！ 東京の歴史』（ビジネス社 刊、田中英道 著）

『日本の起源は日高見国にあった』（勉誠出版 刊、田中英道 著）

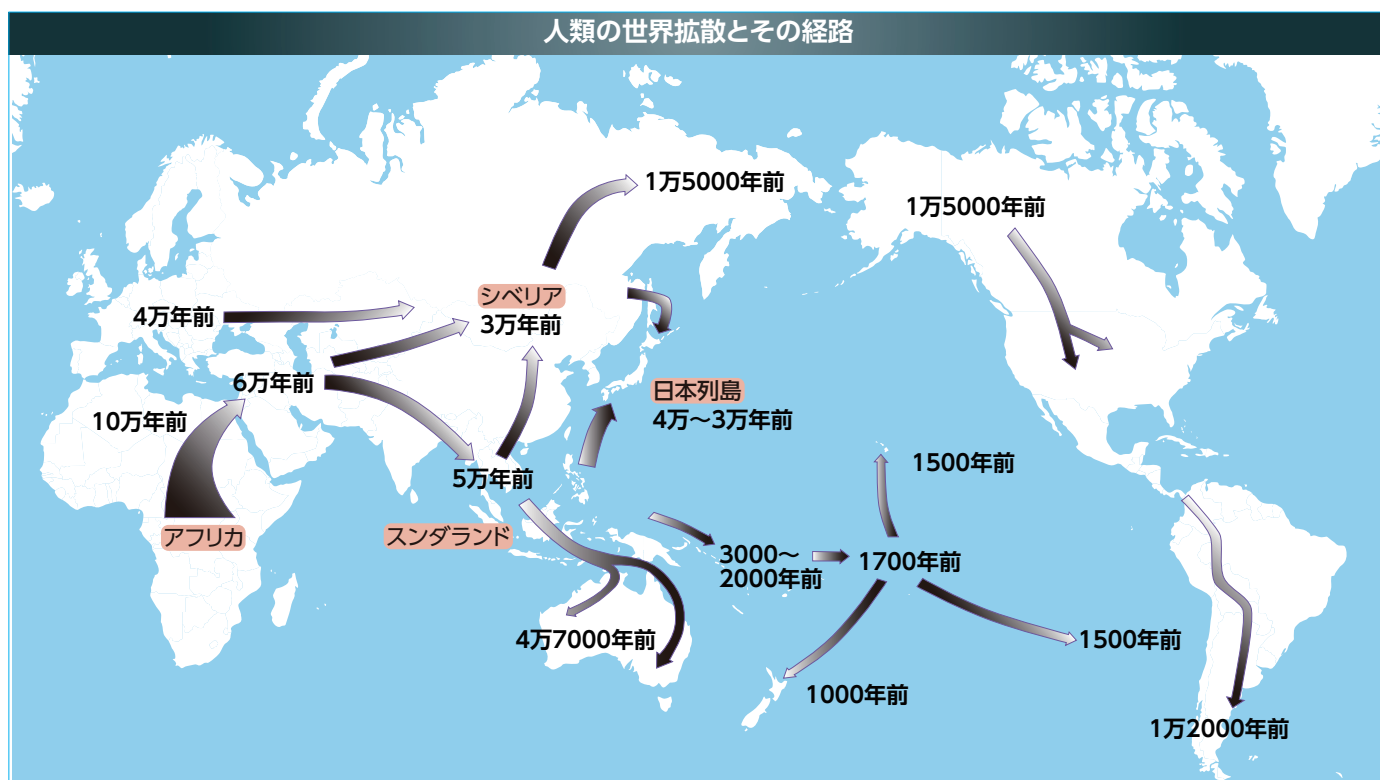


その根拠として、**群馬で発見された旧石器時代の遺物**があります。最初の旧石器が九州や関西ならともかく、東日本の群馬で発見されていることから、こういう旧石器、古い形の石器を使う人たちがすでに約4万年前には日本に来ていたということが分かるのです。

人間というのは、ただ食料がないからとか、単に気候が変動し寒くなったからとか、そういう物理的、

物質的、あるいは環境的な1つの変動によって行動するというのが今までの考え方なのですが、そうではなくて、当時の人間にも精神があったのです。

そういう精神があるということは、**ユヴァル・ノア・ハラリ**という人が『**サピエンス全史**』で書いていますが、認知する力、ある種の観念性というか、神やお金を信じるように物体よりも観念的なものを信じるということが人間の能力であると述べて



旧石器時代の文化遺跡の分布図と岩宿遺跡



います。

彼は、現代ではただの紙切れを「これがお金だ」と、1つの象徴として信じている、それをもって「それが人間なのだ」というように言っていますが、彼に欠けているのは、精神性は人間の行動にもっと結びつくという視点です。

それが「文化」なのです。人間は必ず文化をつくりまします。ただ食べたり飲んだりする、そういう動

物的なものだけではなくて、精神性というものがあるからです。

例えば、エジプト文明では太陽神ラーを信じているということ、つまり太陽というものが、一番最初の人間の精神性、あるいは宗教というもののなのです。それは明らかに朝を意味しています。東から昇って西へ沈んでいく、これは世界中同じなのです。

ユヴァル・ノア・ハラリ



『サピエンス全史』



ユヴァル・ノア・ハラリ(1976-)

ユヴァル・ノア・ハラリは、イスラエルの歴史学者。ヘブライ大学歴史学部教授。
著書『サピエンス全史』文明の構造と人類の幸福、『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来』は世界的ベストセラーとなった。

『太陽の昇る国を目指して』～世界の様々な太陽神信仰



太陽の昇る国

そうすると、太陽が昇る場所はどこか、そこに何かがあるのではないか、それこそが何かの始まりではないかということを感じざるを得ないので。先ほど述べたエジプトもそうですし、あらゆる文明が**太陽神**というのを基本にしています。

ギリシャではアポロ、エジプトではラーのほか、アテン、アトウム、アメン、それからケルトではヘ

ルメスというのがありますし、中国、ペルシャも同様で、あらゆる文明が太陽神を拝んでいるのです。西の国々、つまりアフリカから発した各国の文明の太陽信仰が日本に向かってくるのは必然です。

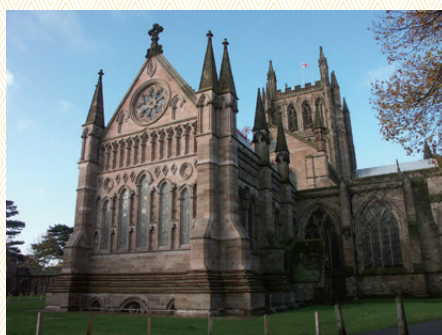
イギリスのヘレフォードにある、中世の寺院に保存されている「**ヘレフォード図**」という不思議な図、世界地図があるのですが、この地図は東が一番上にあり、そこがあたかもパラダイス、天国のよ

『太陽の昇る国を目指して』～ヘレフォード図



ヘレフォード図

イギリスのヘレフォード寺院にある中世の世界地図(「ヘレフォード図」)は東が上に描かれている。今では世界地図は北が上に描かれるが、かつては、東方オリエントの日本が一番上に描かれており、そこには、HEAVEN(天国)と書かれている。ヘレフォード図は、TO図(○の中にT字で表した地図)を基に作られた古地図で、TO図はオリエントが上に、エルサレムが中心に据えられている。聖書神話にも対応しており、日本が描かれている。エデンの園は聖書の創世記に出てくる東方にある理想郷、楽園、パラダイス。



ヘレフォード大聖堂
(イギリス)

うな描き方をされていて、おそらくユダヤ人が書いたのでしょう、中央にエルサレムがあるわけです。

もちろん、キリスト教、ユダヤ教、場合によってはイスラム教もエルサレムが中心で聖地です。そこを中心として一番高い所に東があり、そこをよく見ると、どうも日本のようなある種の島が描かれています。

つまり、昔から日本は「東の果てにある一番のパラダイス」と考えられていたのではないのでしょうか。これは後になると旧約にも出てくるのですが、これについては後でお話します。

とにかく、そういう東の果てにある日本という国、これが世界におけるある種の精神的な目的地になったと考えられるのです。

日本人は、自分の国の名前が「日の本」というのにもかかわらず、実は「世界のもと」という意味合いがあることを分かっていないのです。

同様に、日の丸の旗、若者はみんなこれを振ってサッカー、あるいはラグビーを応援していますが、日の丸が「太陽」だということを全然分かっていないのです。

例えば、皆さんも富士山にはただ登るだけではなくて、一晩過ごしてご来光を拝むわけですが、そのご来光というのが、つまり日本なのです。太陽が昇る所を見る、その国が日本なのです。

ですから、富士山で太陽を見るということは、「世界で1番早く太陽が昇る」のを見ているということなのです。そのことを今みんな忘れてしまっています。それは、18世紀以後、近代になるとすべてが西洋中心になってしまい、西洋以外のものは認めようとしないう、そういう考え方が出てきてしまったからなのです。

それが明治以降皆さんにも伝わって、「日本は大した国ではない、西洋に遅れている」という考え方がなくなってしまったわけです。

ですから、「西洋で、あるいは西洋の延長であるアメリカで起こったことは、すべて偉いのだ」、あるいは「それはまねすべきものだ」というふうに思ってしまう、そういう思考パターンが身に付いてしまったわけですが、それは逆なのです。

本当は、日本が中心なのです。

それは地理的あるいは自然環境が非常に良かったことも要因なのですから、中心だからといって別に威張る必要はありません。ただし、そこに住んでいる日本人はもっとそれをしっかりと自覚しなくてははいけません。

縄文時代から続く精神文化

実を言うと、今の日本は「COOL JAPAN (クールジャパン)」という番組が成り立つように、日本の良さがあらゆるところで取り上げられ、世界がそれを褒めているわけです。

しかし、当の日本人は「そんなものを良いと思うのはなぜだ」と、実感していないわけです。

3.11(東日本大震災)のような状況になってもパニックにならない、そういう時でも共同体として皆さんが親切に、慌てないで秩序を保っている。

そのようなことで、世界が今の日本に「憧れている」と言うと言弊がありますが、「日本に住みたい、日本人みたいになりたい」という評価が高まっているのです。

例えば今回のコロナウイルスにおいても、結局日本は死者が本当に少ないわけです。ドイツでさえも日本の約10倍の死者を数えています。そのほかでは100倍、あるいは数百倍になっているわけです。

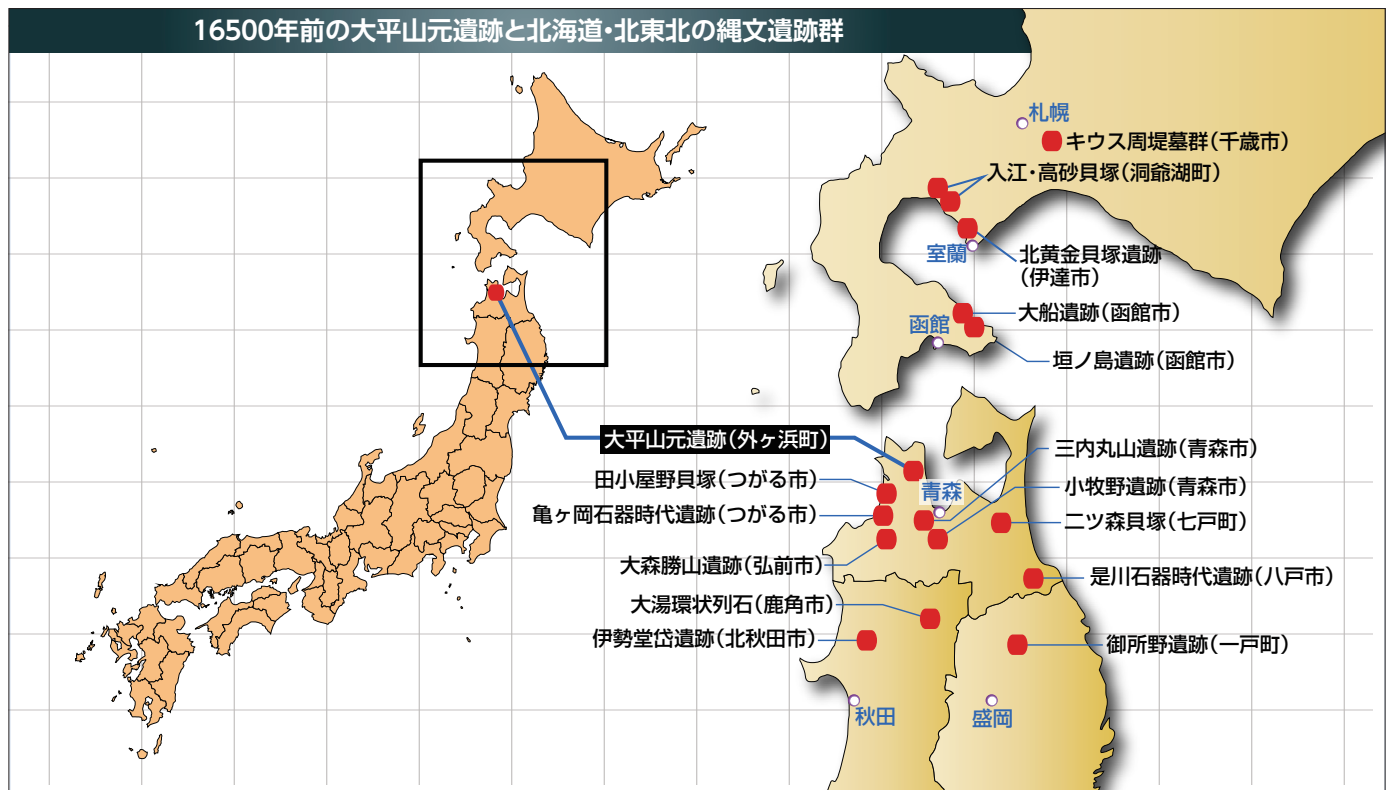
ところが、メディアが、日本でも同じように多くの死者がいるかのごとく宣伝していましたから、日本人はそれを実感できていないのです。

自然における人間の在り方、疫病への対処法は長い伝統の中で培われたものです。

衛生環境、例えばお風呂の入り方も疫病にならないための対策の1つです。西洋ではお風呂の代わりとしてシャワーに入るだけですから、日本のようにお湯に浸かって体がすべて清潔になるということが少ないのです。

青森の北にある**大平山元遺跡**で1万6,500年前の縄文土器が出てきましたが、これは世界最古の土器なのです。

中国など、ほかの場所でも出てきたという話もありますが、非常に例が少なく、おそらく作り物だろうと思います。日本の縄文土器はそれくらい古いわけです。



16500年前の大平山元遺跡 (青森県東津軽郡外ヶ浜町)

写真提供：外ヶ浜町教育委員会



土器というのはもちろん単なる器ではありません。そこで煮炊きをするほか、飾っておくということもあるわけです。

そして「縄文」というのは何かというと、紐なのです。普通でしたら、器には別に装飾をつけなくてもいいわけです。いちいち装飾をつけるのは大変ですから、単に煮炊きをするだけなら装飾は必

要ありません。

ところが、日本はそれ以後1万年以上も縄による装飾を施すわけです。現代の服の装飾ように、ただきれいにさせる、あるいは飾るということではなく、必ず意味があるのです。

縄をつける、そこにはきちんと結ぶ、囲うという意味があります。皆さんご存知の通り、出雲大



社などの神社に行くと、必ずしめ縄というものがあります。樹木、特にそれが老木、古い木であればそこに必ずしめ縄を結ぶわけです。

それを神様だと思い、非常に清らかな、そしてある意味で尊敬すべきものだということで縄を結ぶわけです。

日本では贈り物をする際、箱を丁寧に包み、最後に必ず紐を結んでそれを差し上げます。

つまり、中に入っているものを立派なもの、あるいは聖なるものだということを暗示しているわけです。神社も、しめ縄を張ることにより、中が聖なる場所だということになるのです。

そういうことが縄文時代にはすでに始まっていたということが言えるわけです。つまり、土器の周りに縄を締めるように包むということは、そこに聖なるものがあるということで、そういう信仰がすでにあったということになるわけです。

そして、そういう縄文土器が、後になるともっと素晴らしい火焰土器、それから私が水紋土器と呼んでいるものに発展していくのです。

こういうことから、やはり日本にはそういう精神文化があり、それを日本が始めたのだということが分かるのです。

そしてこの後も旧石器時代は続いて、大体7、

500万年ごろからそういう類のものが大陸に現れます。ところが、日本では1万6,500年前に生まれているわけです。これは、このころすでに日本に定着した人たちが多かったということ意味します。

日本では自然の中で生きることができます。非常に森林が多く、国土の70%もありますが、これでもかなり減った方で、昔はもっとあったわけです。

森林は砂漠とか荒地とは違い、樹木があり、採取ができます。クリ、ドングリ、それからキノコなど、ありとあらゆる実と葉があり、それらを採取することができます。

もちろんそこには動物もいます。最初はマンモス、それからオオカミもいたのですが、どんどん絶滅していきました。しかし、その後もイノシシ、シカ、ウサギなど、いろいろなものが生きています。そういうものを狩猟して食べることができます。もちろん漁労もできます。日本にはたくさんの川がありますからたくさんの魚が生きています。

つまり、日本に住めば食糧の心配をする必要はなかったのです。これは後の三内丸山など、大きな都市めいた部落をつくっても同じことが言えるわけです。別に米がなくても、あるいは麦がなくても、クリの木を植えて、それを主食にして生きていたのです。

三内丸山遺跡(青森県青森市)

写真提供:三内丸山遺跡センター



三内丸山遺跡は、今から約5900年前～4200年前の縄文時代の集落跡。縦穴建物跡、大型縦穴建物跡、大人の墓、子どもの墓、掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡などがみつき、集落全体の様子や当時の自然環境などが明らかになっている。膨大な量の縄文土器、石器、土偶、木器他の地域から運ばれたヒスイや黒曜石なども出土。ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培植物が出土し、DNA分析によりクリの栽培が明らかになるなど、数多くの発見が縄文文化のイメージを大きく変えた貴重な遺跡である。

逆に、ヨーロッパはアフリカから近いですから、約3万年前から4万年前、かなり早くから人類が到達しています。

先ほど述べたアルタミラやラスコー、ショーヴェといったいろいろな所に今も洞窟の壁画が残っていますがこれらの人たちは、洞窟で生きていたのです。

つまり、日本のように縦穴住居を作り、そのまま土地の上にわらぶきの屋根を作って住むのではなく、彼らは動物が怖くて、常に恐怖の中で洞窟の中にしか住めなかったのだらうと思われます。

ですから、そこで動物に対する恐れ、あるいは動物に対する信仰というのが発生するわけです。アルタミラ洞窟に行くと、大きなバッファロー、猛牛が描かれています。

しかし、そんなものを食べたのかというと、そうではないのです。その時代に食べたのは、シカやウシなどの比較的小さな動物です。それにもかかわらず、絵の中ではバッファローが多く描かれているのです。

今までは、「食べたいためにあれを描いたのだ」というような解釈をされていたのですが、それは唯物論的な見方で、そうではないのです。

唯物論、マルクス主義は物質的な欲望しか認め

ませんから、そういう視点では歴史が正しく見えないのです。こんなに大きく描かれているのは、やはり精神的なもの、つまり神様なのです。

動物の中に神的なものを感じるから、スペインの北部のアルタミラ、フランスのラスコー、それから南仏のショーヴェといった所で、巨大な牛、あるいは巨大なバッファロー、そういうものが描かれたわけです。

つまり、ここでは太陽信仰ではなくて猛牛信仰、動物信仰というものがあつたのだらうと思うのです。しかし、これらの人口は少ないわけです。

これに対して、日本に来た人たちは、先ほど述べましたように太陽信仰を持っていました。実は、太陽信仰というのは、太陽を拝むだけでいいのであまりものを作らないのです。

日本の九十九里浜、あるいは東北の東海岸には、今は確かに**鹿島神宮**、**香取神宮**がありますが、ほかには何もないのです。つまり、日本の信仰、自然信仰というのは太陽そのものが対象なのです。

実を言うと、**伊勢神宮**というのは後の時代、アマテラスという神様を一応神話で創った後、造られたわけです。

しかし、**鹿島神宮ではどういう形態**をとっているのかというと、まず大きな鳥居があります。ところ



が、それを越えて進んでも奥社があるだけで何もないのです。その道は太陽が昇って降りる、その通り道なのです。

ですから、太陽が昇るのをずっと見て、そして沈むのを見る、それを拝むところが鹿島神宮なのです。ですから、本殿が北を向いて通りの横にあるわけです。

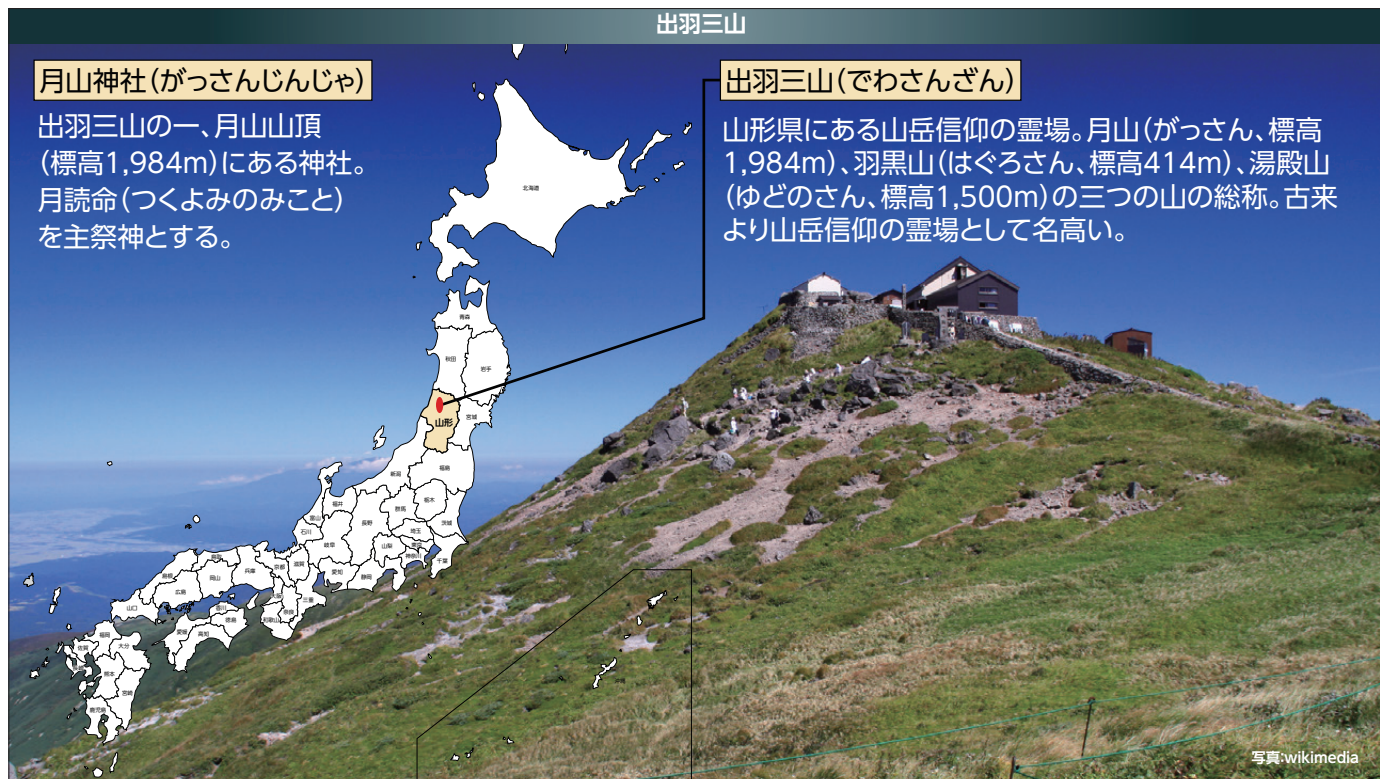
それで分かるように、日本人の一番の信仰は太

陽を拝むこと、月もまた同じです。

月読命(つきよみのみこと) がいても、月読命(つきよみのみこと) の神社がないというのは、やはり月を拝むだけですから、どこへ行っても拝めるわけです。

このように、太陽と月が日本人の拝む基本的な対象ですが、結局伊勢神宮という太陽信仰、つまりアマテラスだけが造られ**月読命(つくよみのみこ**





と)の神宮がないのです。

【月読命(つくよみのみこと)】月の神。伊邪那美命(いざなぎのみこと)の子。姉は太陽の神、天照大御神(あまてらすおおみかみ)、弟は海の神、須佐之男命(すさのおのみこと)。天照大御神は高天原(たかまがはら)を、月読命は夜の食国(よるのおすくに)を、須佐之男命(すさのうのみこと)は海を統べる。この三柱の神々を三貴子(みはしら)のうずのみこという。

多分、今の出羽三山の月山、あそこがおそらく月を一番近い所で拝むという、そういう意味合いがあったのだらうと思うのです。

いずれにしても、日本は岩なら岩、木なら木、山なら山、それ自体が神様でしたから、それを拝むということになるわけです。

世界から日本にやってきた人たち、つまりアフリカから出発した人たちが日本までやってくると、とにかくまず関東・東北に行ったわけです。群馬に最初の旧石器時代の遺跡があるので、それが分かるわけです。

そして、縄文、弥生、特に縄文は関東と東北にしかほとんど遺跡がありません。縄文の後期まで、関東と東北にしかほとんど遺跡がないのです。これについてはいずれお話ししますが、弥生になって初めて関東から九州に移動します。

邇芸速日命(にぎはやひのみこと)、あるいは瓊

瓊杵尊(ににぎのみこと)がいわゆる天孫降臨をされて、奈良や九州へ行くという、それが神から人間という1つの歴史になるわけです。しかし高天原といわれる時代には、まさに関東・東北しかなかったのです。

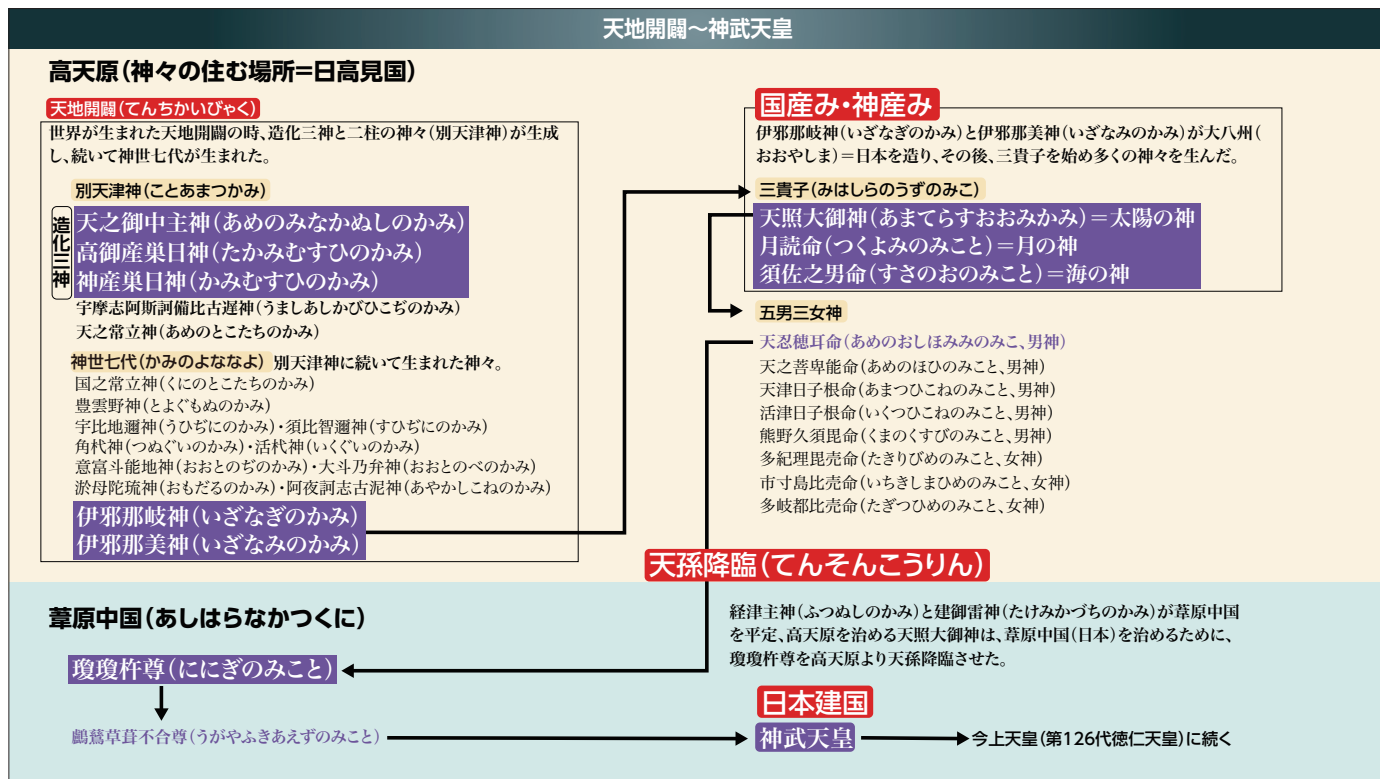
【高天原(たかまがはら)】『日本書紀』『古事記』などに記された神々の住む天上の世界。天照大御神の孫代である瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)が高天原から九州の高千穂に天孫降臨し、曾孫代にあたる神武天皇が初代天皇となった。

そのことも非常に重要なことで、日本人は日本だけにいると視野が当然狭くなるわけで、今まで日本の歴史をそういう大きな視点から見ることはなかったのです。

そしてやはり明治以降、西洋中心史観が入ってきて、ますます日本にそんな立派な歴史があったと思わなくなるわけです。しかし、日本に最初に来た人たちはすべて西から来た人たちなのです。ですから、日本人を見るといろいろなタイプの人がいるのです。

これは朝鮮やモンゴル、中国とは違います。中国、モンゴル、あるいは朝鮮というのは、大体二次元的な顔をしているわけですが、日本人は三次元的な、立体的な顔をしている人が多いのです。

もちろん二次元的な顔をしている人もおり、例えば、浮世絵美人というのはどちらかというと二



次元的顔立ちです。

実を言うと、ある種の背が高く、鼻が高い、そういう人たちが古代にはいたのです。縄文期の遺跡で見つかった骨は、今と結構違って鼻が高かったり、三次元的な顔をしているのです。このように、いかにも西から来た人たちだということが分かるのです。何度も言うように、朝鮮や中国の血液型とも違いますから、西から来ているということは明らかです。

そういう新しい視点をしっかりと歴史に取り入れれないと日本の歴史が分かりませんから、いずれは日本の教科書もそう変わってほしいと思っています。

そういうことが一番重要なことなのですが、いまだに日本は朝鮮や中国から、せいぜいモンゴルから来た人たちだけだと思っている人が多いのです。しかしその前に、西から来ているのです。

中国も、実を言うと西から来た人がいるのですが、定着した時間が長いために、ああいう二次元的な顔になっていくわけです。

日本には船で来ている人も多いのです。中東に**ゴブスタン遺跡**という、アゼルバイジャンの黒海沿岸の遺跡があります。先日そこに訪れて発見したのですが、船の遺跡があり、船が描かれているわ

けです。

非常に巨大な船なのですが、面白いのは、一番先頭に太陽が描かれているのです。つまり、この船は太陽に向かって漕いでいたということが分かるのです。

これはエジプトでも同様です。ラーを先頭に立てて船が描かれていて、太陽に向かっていくということを暗示している壁画が描かれています。

つまり、これは決して私だけが言っているのではなく、こういう巖窟の壁画にもそういうことが描かれているのです。

先ほども述べましたように、世界図を描くと一番上に東が来て、そこに日本らしい島が描かれている、あるいは朝鮮があり、そこから島が描かれているというような図が残っています。

それから、カトリックの教会堂、大きな寺院に行くと、いわゆる内陣という所は必ず東を向いているのです。それは、「光は東方より」という感覚があったからで、そういう生活が人々を律していたわけです。

そうすると、日本に向かってくるのは当然なことなのです。「あのころは原始的だから、距離も方向も分からなかったはずだ」と考えがちですが、そのようなことはあり得ないのです。太陽の昇るとこ



ろに向かっていけばいいわけですから、それほど難しいことはありません。

でつまり、太陽に向かうということがあらゆる科学のもとであったわけで、それによって初めて大地というものがどういうふう構成されているか、つまり東と西、必ず方向があるのだということが分かるのです。

それから、日の入り日の出というのは季節によって変わっていく、そういう秩序というものを太陽が持っているという、非常に大事なことが分かるのです。

日本に来た人たちはそういう太陽の秩序を知っていますから、もう神様は必要ないのです。つまり、太陽を見ていればいい、あるいは太陽と月を見ていればいいのです。月の満ち欠けと女性の月経の関係というのはまさにそれです。

つまり、あらゆることが月と太陽で考えられるということが基本なのです。ところが、後になってユダヤ人たちは自然の上に神様を創ってしまいました。それを語るとまた長くなってしまうので、別の機会といたします。

縄文遺跡ができるということは、そういう文化があったということです。最初は日本の中で移動していましたが、すぐに定着し始めました。

それは土器の変遷でも分かることで、これは後で土器土偶についてお話ししますが、ある時から、定着しないと作れない大きな土器を作り始めます。

大きな土器は作ってもすぐ割れてしまいますし、大きなものを持っては移動ができないので、最初は小さな土器から始まります。

しかし、その土器にも装飾を施すということは、すでにそこにある種の精神性、あるいはある種の意図があるわけです。それは単に食べたり飲んだりする以外の、1つの考えになるわけです。

新石器にしても旧石器にしても、石器だけではただ食べるため、動物を射るため、そういう非常に直截な物質性、直截な欲望でしかないのです。

現代であれば簡単にただペンキを塗ればいいとか、陶器にマークを描けばいいというような、そういう簡単な考えがありますが、しかし当時それは簡単なことではありませんでしたから、装飾を施すということは、ある種の精神的必要性というのを自覚するところまで至っていたというわけです。

ですから、結ぶということによって初めて人間の文化が始まったということが分かるのです。

そして、それまでは単に煮炊きをするだけでそのまま食べていた肉や野菜、あるいは木の実に塩を入れる、あるいは何らかの形のだしなどでいわ

ゆる味付けをすることによって、食文化が始まるわけです。

神話と歴史が結びつく国、日本

実を言うと私は、神話と歴史は結びついているということを考えています。

『日本書紀』とか『古事記』、あるいは『魏志倭人伝』というものに書かれているもの、それを歴史に結びつけようと考えているわけです。

津田左右吉以来、戦後の多くの歴史家たちは「神話に書かれていることは荒唐無稽な話で何だか読んでもわけが分からない、それ自体がフィクションである」と、そう言って片付けていたのです。

ところが、私は自分の仕事をやっているうちにそのことに気が付いたのです。

レヴィ=ストロースという人はユダヤ人の世界的な文化人類学者で、私は学生のころ講演会を見たことがあるのですが、実は、この人が1980年ごろから「日本が非常に面白い」と、しきりに来日していました。

彼はもともと中南米のインディアンたちの研究を行っていた文化人類学者で、彼らの風習や神話、



津田左右吉（つだ・そうきち、1873-1961）
『日本書紀』『古事記』を史料批判の観点から研究した歴史学者。早稲田大学教授。



クロード・レヴィ=ストロース（1908-2009）
フランスの文化人類学者。人類学・神話学を専門とした。親日家として知られ、1993年春の外国人叙勲で勲二等旭日重光章が授与されている。日本ほど神話と歴史が続いている国はないとし、著書『月の裏側 日本文化への視角』では、「私が人類学者として賞賛してきたのは、日本が其の最も近代的な表現においても、最も遠い過去との連帯を内に秘めているということです。」と述べている。

どういう人たちが生きていたのかを取材していたのです。彼はそういう研究をする中で、「それらが現代にきちんと対応している」ということを述べ、私はそれに非常に共鳴したのです。

それからもう1人、**アンドレ・マルロー**という人がいました。この人は美術を勉強した人で、戦前は『人間の条件』や『希望』などいろいろな小説を書いた大小説家だったのですが、特に日本、東洋に非常に興味を持っていて、『人間の条件』はキヨという日本人が主人公です。

そのように東洋に着目し、そして革命的思想もあり、**スペイン革命（スペイン内乱）**にも参加したという、ある意味左翼的な人だったのです。ところが、戦後はそれを止めてしまいました。

【スペイン内乱】 1936～1939年、フランスで起こった内戦。ソ連・メキシコが支援する左派・人民戦線政府と、ドイツ・イタリア・ポルトガルが支援するフランシスコ・フランコ率いる右派・反乱軍が戦い、右派フランコが勝利、独裁体制を成立させた。

そして彼はニヒリストですから、「神なき世界では芸術が神となる」という考え方を掲げ、世界中の芸術、美術を研究し、日本にも3～4度来ています。

同じようにレヴィ=ストロースも晩年である70



アンドレ・マルロー (1901-1976)
フランスの作家、文化相。親日家として知られ『人間の条件』『王道』などの作品がある。

歳ごろから来日しているのですが、ただ単に日本を研究するのではなく、翻訳されている日本の神話をとにかく興味深く研究して、「日本ほど神話と歴史がつながっている国はない」と言うわけです。

アンドレ・マルローは、世界の基本的な文化として日本を認めていて、日本の美術、特に肖像画、あるいは仏像を非常に褒めています。

それほどに系統的に書いていませんから、皆さんはあまりご存知ないでしょうが、こういうフランスの非常に優れた知識人が日本を公平に見ているのです。

私はフランスに留学していましたからよく分かりますが、フランスという所は西洋の中心地であると同時に、割合大きな視点で世界を見ることができる民族なのです。

先ほども述べましたように、レヴィ=ストロースはユダヤ人です。多くのユダヤ人がフランスだけで

はなく、イギリス、もちろんアメリカにもいるわけですが、そういう人たちは比較的公平にものごとを見ようとするのです。

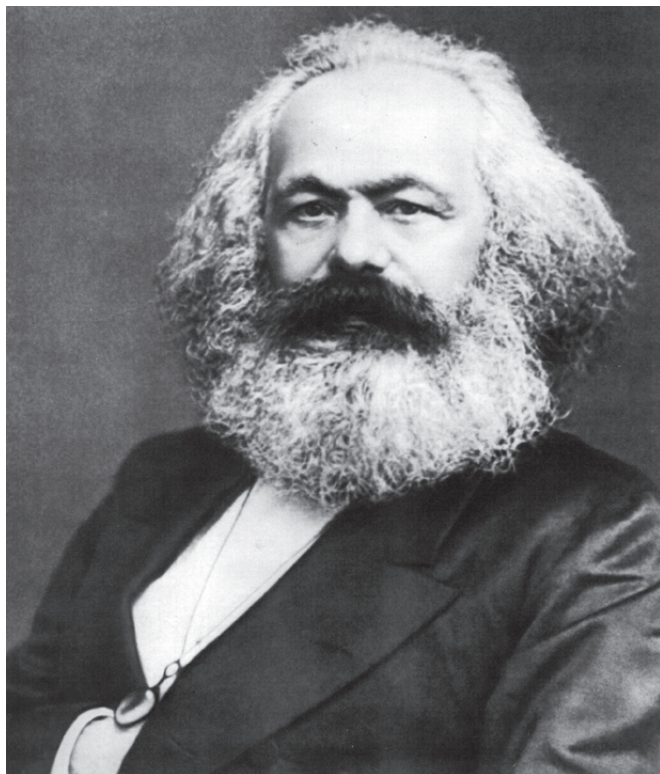
やはりフランス人によるフランスの歴史というのは、フランス中心になってしまいますし、ドイツもまた同様です。しかし、ユダヤ人は割合世界を俯瞰(ふかん)して見る、そういう人たちが多くなります。

最初にお話ししました通り、私はヨーロッパ3カ国に留学しました。ところが不思議なことに、大体どこも先生はユダヤ人だったのです。

フランスに行けば、グロデッキもチムリエもユダヤ人でしたし、イタリアに行けば、トルナイもブランディもユダヤ人です。そしてドイツのパノスキー、あるいはヴァールブルクもそうです。ヴァールブルクは大ユダヤ資本家の一族であります。

このように、ユダヤ人が世界の人文学を指導しているわけです。ちなみに、先ほど触れたマルクスもユダヤ人ですが、私はこのように外国で学ぶことによって、マルクスのことを One of them (ワン・オブ・ゼム) だと思えるようになりました。

私は「いや、あんなのはうそなのだ、あれは1人



カール・マルクス (1818-1883)
ドイツの思想家、マルクス主義(共産主義)の祖。父はユダヤ教のラビ(指導者・学者)、母もユダヤ教徒だった。

のユダヤ人の考え方に過ぎないのだ」と思っているのですが、日本では今も「マルクスを信じれば世界が分かる」などと言っている、マルクスを絶対に信じている「マルクスボーイ」が多いのです。

ところが、マルクス的な見方はすべて間違いだったのです。結局1度も革命は起きていませんし、社会主義などは実現しない考え方なのです。20世紀の実験を経て、ソ連は崩壊し、中国は異形の資本主義になり、すべて幻想だったということが分かってきたのです。事実としてそういうものが出てきた以上、日本の歴史に対する見方も変えなくてはいいけないのです。

レヴィ＝ストロースという人は九州を訪れ、「歴史が続いているということが分かった」と述べたのですが、私の場合、奈良はもちろん、関東でもそれが分かったのです。

縄文時代は日高見国であった

それによって私は、「**日高見国**」という国が実在したのだということを言っているのですが、日高見国という名前は記紀、つまり『古事記』、『日本書紀』の両方に出てくるわけです。

【日高見国（ひだかみこく）】古代において東の大和や蝦夷を指す言葉。田中英道教授は、日高見国は関東にあり、日高見国こそ高天原であるとの見解を示している。

ところが、この記紀が作られたのは7世紀から8世紀の初めですから、これはその時に作られた神話なのです。やはりそれ以前の紀元前、弥生前の世界についてはほとんど記録がないため、分からないのです。

彼らが7世紀、8世紀の時点で書いたのが『古事記』なのですが、ここには富士山が1回も出きませんし、東国のことはほとんど触れられていません。

これは記紀の欠点であるのですが、同時に大和、つまり関西方面に日本の権力が移動したということを示しているわけです。

縄文遺跡の分布図を見ても、ちょうど弥生以降、すべて西に遺跡が残るわけです。これは、縄文から弥生にかけて1つの変動が起きたことを意味しているのです。つまり、人々が東北関東から関西に、

あるいは九州に移っていったということです。

これはなぜかということ、まず寒冷化が理由に挙げられます。なぜ三内丸山に5,500年前から1,500年間も人々が住み続けたのかということ、あの地域は温暖だったからです。

現在のような気候、つまりあれほどの雪が降るのであれば、住むには適していません。ですから、縄文時代には温暖であったということなのです。

九州はもちろん、北海道にまで縄文の遺跡がありますけれども、東北関東は温暖だったためにたくさんあるわけです。

新潟、あるいは長野などは今でこそ冬には寒いのですが、そういう所からも5,000年前～4,000年前の、縄文中期の見事な縄文土器がたくさん出てくるわけです。このように、今と違った東国の姿があったということです。

これが後になると**蝦夷**になり、エミシなどのいわゆる差別用語が生まれてくるのですが、ちょうど記紀が書かれるころから東国がエミシになってくるわけです。

【蝦夷（えみし、えびす、えぞ）】畿内の大和朝廷から見て東の関東や東北、北海道に住む人々の事。

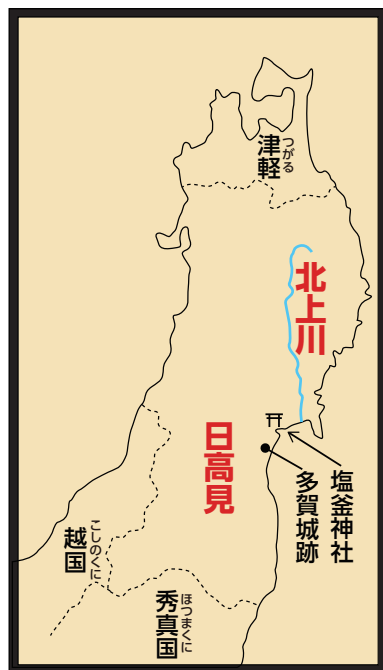
それは、基本的に移動することなく残った人たちだけが東国にいるということになり、そこに新しい移民が入ってきたために、そこがエミシ、あるいは毛人になったと言えらると思うのですが、それはまた後でお話しします。

日高見国というのはどういう国だったのかといえますと、「日が高く昇る国」という意味で、これは『風土記』にも出てきます。ただし、『風土記』や『古事記』、『日本書紀』では、すべて否定的な意味あいで語られているのです。

「日高見国っていうのは強い国だ、非常に広い国だ、豊かな国だ」と言いながら、「人間そのものはすぐに従う」などと言われ、彼らは野蛮人とまでは言いませんが、とにかく軽蔑しているわけで、それが次第にエミシになっていくのです。

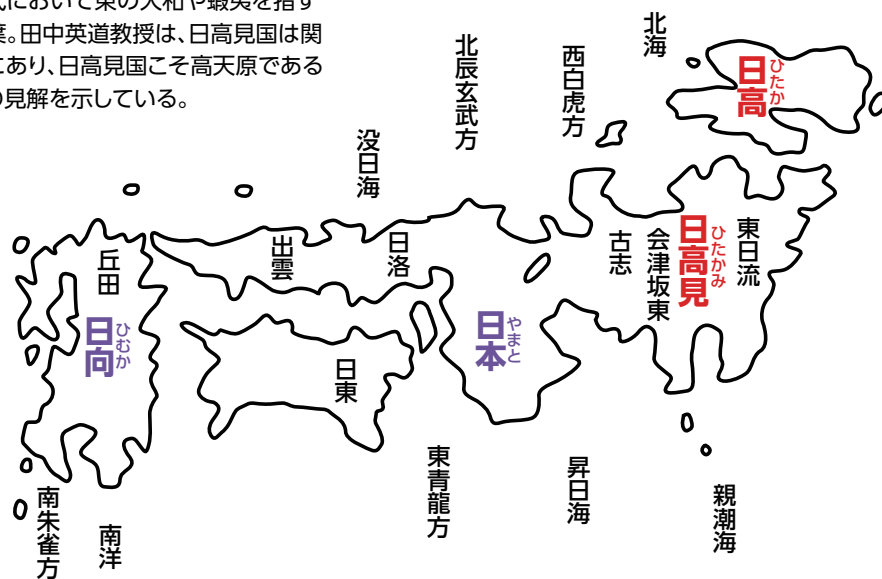
しかしそれは、日高見国というものがあったという証拠でもあるわけです。今も東北には、**北上川**という川があります。北の上（かみ）だからそういう名で呼ぶのだろーと思われているのですが、

日高見国



日高見国

古代において東の大和や蝦夷を指す言葉。田中英道教授は、日高見国は関東にあり、日高見国こそ高天原であるとの見解を示している。



「これは日高見川だ」と土地の人は言うわけです。

そして、宮城を含めたあの辺りには日高神社という神社がたくさんあります。それから鹿島神社、香取神宮、香取神社など、東国にあった神社がたくさんあるのです。

これまで、このような東国に対する研究はあまりなされていませんでした。東国の人には西にコンプレックスを持ってしまっていて、自分たちを自ら「東北人というのは暗い人だ」とか「貧しい人だ」というふうに思っているのです。私は東北大学にいましたからよく分かるのですが、それはとんでもない話です。

余談になりますが、私自身は東京出身ですが、母は鹿児島出身で、戦中に東京へ移り住みました。明治の日本海軍などは鹿児島出身者が主体であったように、鹿児島や長州、つまり薩長というのは明治以降非常に力を持っていたのです。

それについてはまた別の話になるのですが、江戸時代に西洋に対して一番門戸を開いていたのが薩長だったのです。そのような経緯があるため、明治政府の時代、外国に対する態度をリードしたのは薩長なのです。

薩長の薩摩とは何か、ご存知の通り鹿児島ですが、鹿児島というのは面白いところです。

鹿児島という名前に、子どもを意味する『児』

という文字があるのはなぜか、明治時代には鹿児島出身者が中心であったのなら、『児』という文字があるのはおかしいと思うのです。

ところが、あれは「関東の鹿児島の子」という意味があることを知って、初めて理解することができるのです。つまり、**関東から鹿児島へ移り、そして宮崎から東征した**のが神武天皇だということを意味しているわけです。今の日本史では、関東東北を無視してそういうことにも触れないのです。

『空白の日本史』というタイトルを持つ、東大の先生の本がありますが、関東東北のことを一切述べない自分自身が空白であることにも気づいていないわけで、これこそがまさに「空白」なのです。

これは記紀が関西でできたからで、その結果、大和国しか考えないことになるわけです。ですから、今私は「日本国史学会連続講義」でその読み替えをしています。

例えば、『万葉集』では富士山のことをあれこそ日本の天地（あまつち）の原郷だと、すぐに富士山が出てくるのです。ところが『古事記』『日本書紀』になると一切出てきません、それは関東を無視しているからです。

これについてもまた後でお話しをしますけれども、『日本書紀』にも日高見国という名前がきちんと出て、ヤマトタケルもそこを征服したと言ってい



るわけです。そして、鹿島香取の辺りに高天原という名前の3つの土地も出てきて、いまだに残っています。

これらのことから、やはり関東に高天原があった、それはつまり日高見国であったということが徐々に分かってきたのです。

新井白石という江戸時代の学者も「日本では神は人だったのだ」と、同じことを言っているのです。

私ほどはっきりと歴史的に述べてはいませんが、関東東北に人がいたから、その先祖が神になり、それが神族となって、奈良、大和、京都をつくったのだ、関西をつくったのだ」ということを言っているわけです。

そして縄文の時代、いかに関東東北に人口が多かったのかということも、日高見国の存在は結びついてくるわけです。

ちなみに、今の多くの人は『魏志倭人伝』を記紀以上に注目しますが、この『魏志倭人伝』というのは、そもそも作者の陳寿が歴史ものの小説を書く人なのです。中国では歴史はすべて小説、つまりフィクションなのです。

もちろん題材は歴史を借りているのですが、勝手にストーリーを作ってしまうのです。ですから、『魏志倭人伝』は信ぴょう性が乏しく、日本のこと

を書いていたとしても、何かのうわさや、どこからの情報を伝え聞いたぐらいのものなのです。作者の陳寿は魏から全く動いていません。

「魏に日本人がやってきた、遣魏使が来た」と



新井白石(あらい・はくせき、1657-1725)
江戸中期の朱子学者。歴史、地理、言語、文学など多様な分野に精通した。『古事記』『日本書紀』を始め日本神話を研究し、神々は人であり高天原は天上の架空の場所ではなく常陸国(茨城県)であると述べている。

というようなことを言いますけれども、よく読んでみるとどんな日本人であるのかよく分からないのです。もしかすると来ていなかったのかもしれないとも思えるのです。

日本では、あらゆる古いできごとは神社がその足跡をきちんと残しています。ですから、アマテラスの神社はもちろん伊勢神宮ですけれども、鹿島神宮は**建御雷神（たけみかづちのかみ）**、それから香取神宮は**経津主神（ふつぬしのかみ）**、全部神話の神々がきちんと関東にいたということが分かるのです。

【建御雷神と経津主神】神産みにおいて伊邪那岐神（いざなぎのかみ）が男神（かくづち）の首を切った刀、十字剣「天之尾羽張」（あめのおはばり）についた血から、建御雷神・経津主神は生まれた。建御雷神・経津主神は、葦原中国（あしはらなかつくに＝日本）を最初に平定した軍神・武神である。武甕槌神は茨城の鹿島神宮に、経津主神は千葉の香取神宮に鎮座する。

『新撰姓氏録』（しんせんしょうじろく）という、815年にできた京都のすべての氏族を分けている記録があります。その中の「神別」というのがつまり「神の人たち」ということなのですが、それはちょうど関東東北の人と同じなのです。

藤原氏、物部氏、忌部氏、みんな関東出身の人たちということで、神様、神別に入ります。そして

神武天皇以来、大和で生まれた人たちというのは皇別、それからもう1つは帰化人たち、秦氏や和氏など、中国や朝鮮から来た渡来人たちがいるわけです。

ただし、朝鮮から来たといってもそこを經由してきただけという人たちが多く、これは弓月君（ゆづきのきみ）と言ったりしますが、これも後でお話します。

いずれにしても、このように日高見国の人たちが高天原を形成しているのだということがほぼ分かってきたのです。

さらに検討していきますと、日高見川があり、北上川があり、日高神社があり、北海道には日高地方があります。また埼玉にも日高市があり、今の美濃、名古屋や岐阜の方には飛騨地方がありますが、これもつまりは日高です。

そのほか伊勢にも日高地方があるなど、日高という言葉が残る地名は結構多いのです。

これはもう日高見国があったという記憶なのです。そうやって見ることによって、日高見国が実在したことが分かるのです。

そして決定的なのは、**祝詞**を読むと必ず「大倭日高見国が日本だ」と書いてあるわけです。これは宮司さんに聞けばすぐ分かるものです。

新撰姓氏録の3つの分類

815年（弘仁6年）に編纂された氏族名鑑『新撰姓氏録』（しんせんしょうじろく）によれば、氏族は以下の3つに分類される。

皇別

筆頭にあげられる。神武天皇以降の天皇家から分かれた335氏族のこと。清原、橘、源などがある。

神別

神武天皇以前の神代の404氏族。さらに「天神」、「天孫」、「地祇」にわかれる。

「天神」は瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が天孫降臨した際に付き随った神々の子孫。藤原、物部、忌部、中臣など246氏。

「天孫」は瓊瓊杵尊から3代の間に分かれた子孫。尾張、出雲など128氏。

「地祇」は天孫降臨以前から土着していた神々の子孫。安曇、弓削など30氏。

諸藩

渡来人系の氏族。秦、大蔵など326氏

大祓詞(おおはらえのことば)

大祓詞

高天原に神留り坐す皇親神漏岐神漏美の命以て八百萬神等を神集へに集へ賜ひ神議りにて我が皇御孫命は豊葦原水穗國を安國と平けく知ろし食せと事依さし奉りき此に依さし奉りし國中に荒振る神等を神問はしに問はし賜ひ神掃ひに掃ひ賜ひて語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて天の磐座放ち天の八重雲を伊頭の子別きに千別きて天降し依さし奉りき此く依さし奉りし四方の國中と大倭日高見國を安國と定め奉りて下つ磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知りて皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて天の御蔭日の御蔭と隠り坐して安國と平けく知ろし食さむ國中に成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は天つ罪國つ罪許許太久之罪出でむ此く出でば天つ宮事以ちて天つ金木を本打ち切り末打ち断ちて千座の置座に置き足らはして天つ苦麻を本刈り断ち末刈り切りて八針に取り辟きて天つ祝詞の太祝詞事を宣れ此く宣らば天つ神は天の磐門を押し抜きて天の八重雲を伊頭の子別きに千別きて聞こし食さむ國つ神は高山の末短山の末に上り坐して高山の伊賀理短山の伊賀理を掻き別けて聞こし食さむ此く聞こし食して罪と云ふ罪は在らじと科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂ふ事の如く大津邊に居る大船を軸解き放ち鱸解き放ちて大海原に押し放つ事の如く彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌以ちて打ち掃ふ事の如く遺る罪は在らじと祓へ給ひ清め給ふ事を高山の末短山の末より佐久那太理に落ち多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比賣と云ふ神大海原に持ち出でなむ此く持ち出で住なば荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都比賣と云ふ神持ち加加吞みてむ此く加加吞みてば氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神根國底國に氣吹き放ちてむ此く氣吹き放ちてば根國底國に坐す速佐須良比賣と云ふ神持ち佐須良ひ失ひてむ此く佐須良ひ失ひてば罪と云ふ罪は在らじと祓へ給ひ清め給ふ事を天つ神國つ神八百萬神等共に聞こし食せと白す

今までは日高見国というものが分からないため、「大倭日高見国というのは何だろう、日本と言うのではないか」、あるいは「大和国でいいではないか、これは大和を重複して言った言葉なのだ」というふうにししか理解されていませんでしたが、私はそう思いません。

やはり日高見国というのは実際にあり、関東甲信越から北東にかけて、これがすべて日高見国と言ったのだということがよく分かるのです。ですから、それだけ広い地域にいた人たちがちょうど縄文の人たちに重なるわけです。こういう新しい目で見ると、本当に日本の歴史というのは面白いと思います。

縄文人はすべて、今で言う外国人の顔、つまり彫りが深い顔をしているわけです。アイヌ人も縄文人と顔立ちは似ていますけれども、彼らは12～13世紀にモンゴルによってオホーツクに追われて日本に入ってきた人たちで、縄文と関係ない人たちです。

縄文人というのは、北海道に以前より定着していた人たちなのですが、後に寒冷化によって全て西へ移動します。「凍え死ぬよりも移動した方がいい」ということで移動したわけですが、これが神話の中では「天孫降臨」として語られているのです。

高天原というのは関東東北から中部地方にまであった、そういうことが言えるわけです。

このように、縄文時代に日高見国があったということを、まず頭に入れる必要があるわけです。

日高見国そのものは地域としてはずっとあったと思うのですが、それが国として意識されたのは一体どの時期であったのでしょうか。

この時代は非常に人口が少なく、いまだにはつきりした人口は分からないのですが、数万とか十数万という単位で点在していたわけです。

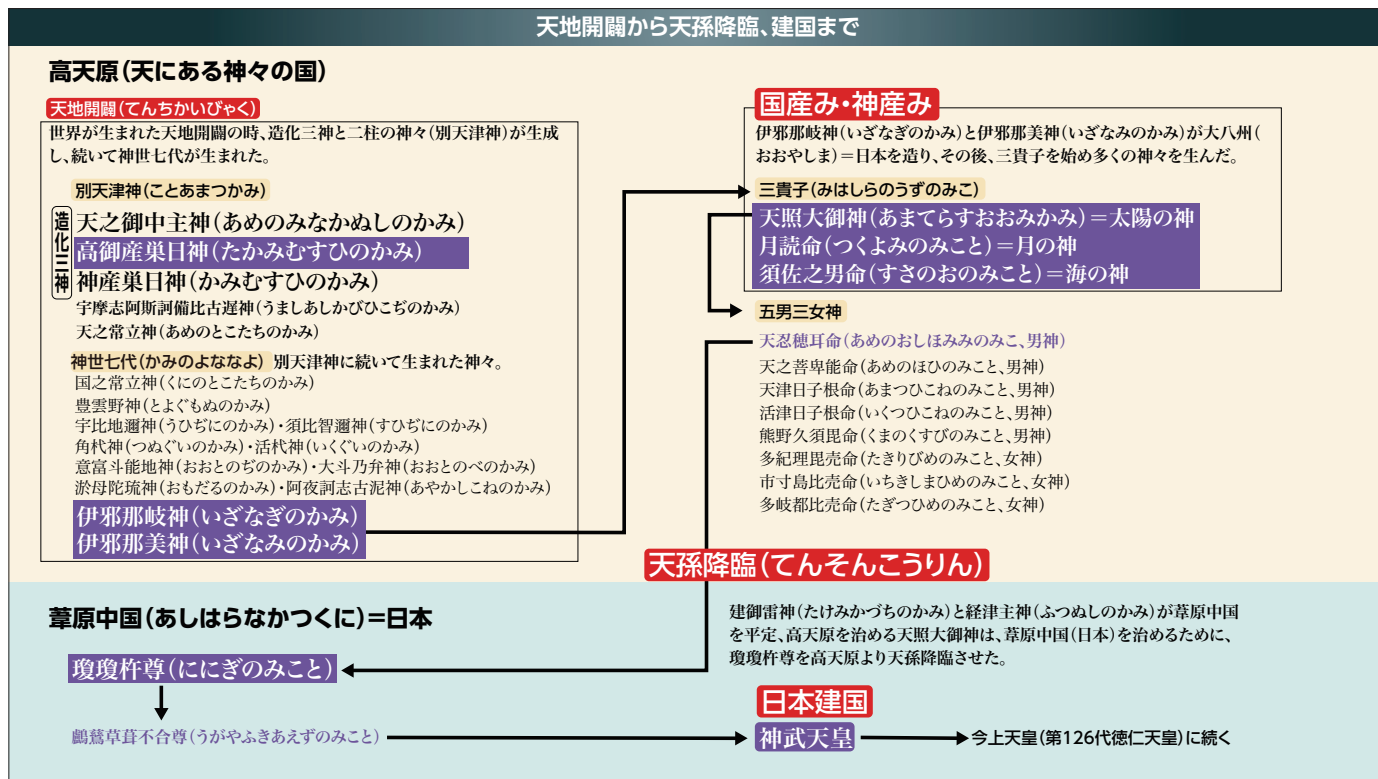
また、関東を中心とした日高見国、つまり鹿島・香取を中心とした近辺の、貝塚や縄文遺跡が非常に多い辺りが中心地であっただろうと考えられます。そしてもう1つ、それと似た別の中心地が仙台あるいは青森、青森は三内丸山にあった可能性があります。

そのように点在していたものが、都市連合、あるいは地域連合の形をとって、その中の**高御産巢日神(たかみむすひのかみ)**、おそらくこれが家系としての天皇の始まりとなるのです。

日高見国と高御産巢日神は関連性が高いと思われます。高御産巢日神という名前には「結ぶ」という言葉が含まれていますが、これは先ほどお話ししましたように、国を結ぶ、縄文と同じ意味があるわけです。

次の時間では縄文土器や縄文土偶についてお話ししますが、「結ぶ」ことによって内部を聖化する、結界あるいは別の世界、別の精神世界と見る、という意味があるわけです。

ただし、都というものが果たしてあったのかと考えると、おそらく都はつくらなかったのだらうと思います。



都というのは、天皇がおられる所と、その周りを取り囲む宮廷によってつくられるのですが、天皇によってどんどん変わっていたのです。何代にもわたって、奈良や京都など同じ場所にいるということが決まったのは7世紀以降なのです。

これはご存知だと思うのですが、天之御中主(あめのみなかぬし)と高御産巢日神(たかみむすひのかみ)、それから神産巢日神(かみむすひのかみ)という、この3つが最初の三柱の神だということを『古事記』や『日本書紀』が言っているわけです。

その真ん中の人、おそらく天之御中主(あめのみなかぬし)というのが太陽のことだろうと思います。

それから高御産巢日神(たかみむすひのかみ)というのがまさに人間神で、それが天皇の、アマテラス以前の祖先です。ですから、この2人、2人と言うと失礼ですが、この二柱の神を今の天皇家も継いでいるのです。

これがいつごろから始まったのかということですが、ご存知の通り、この時期にはたくさんの部落ができており、東北で発見された大平山元遺跡ができた1万6,500年前、あるいは1万年前ごろから朝鮮、中国だけではなく西からもどんどん日本にやってきている中で、国として形成されていっ

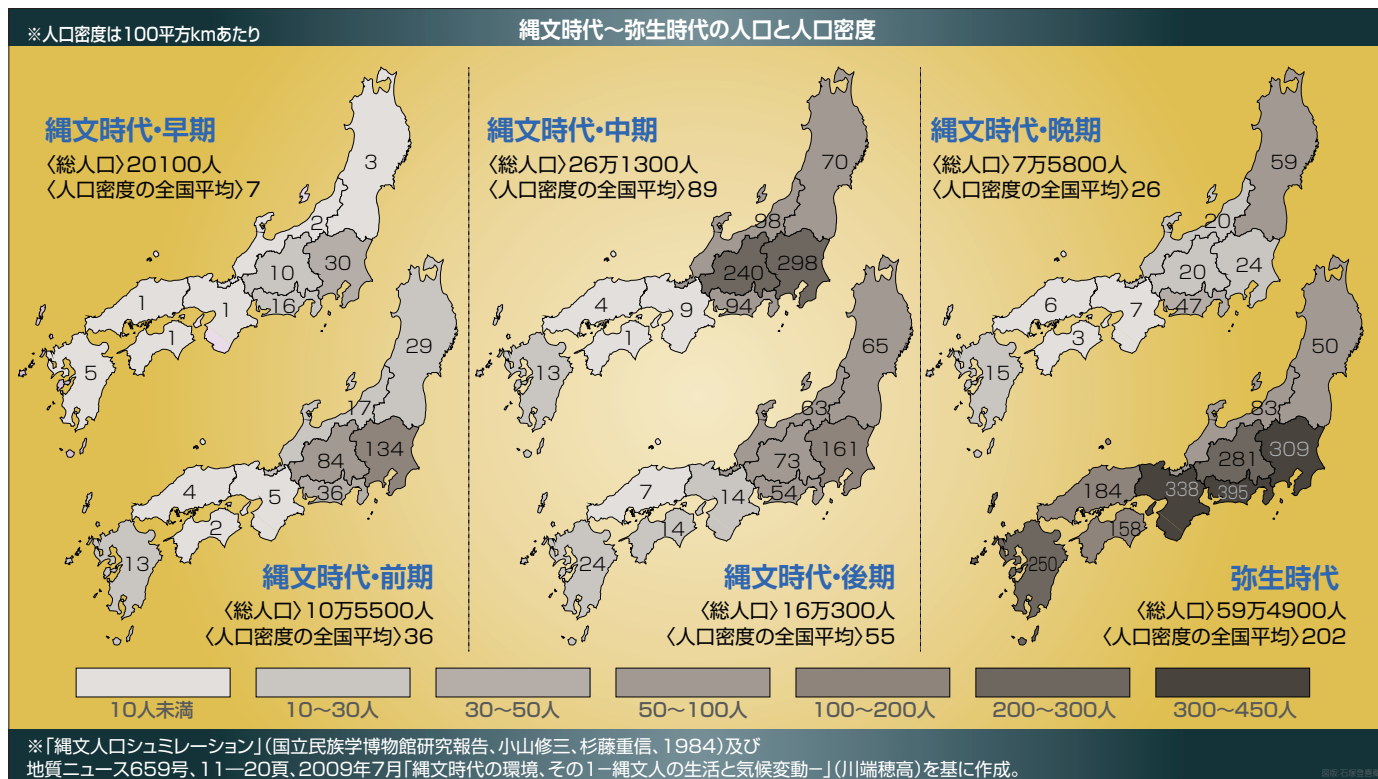
たと考えられます。

あの時代になると、かつての古いことは口述もされなくなってきているわけですが、『古事記』や『日本書紀』の神話の中に、きちんと高御産巢日神(たかみむすひのかみ)、あるいは天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)、つまり「最初にこの三神が現れた」と言っているところが、その最初だろうと思うのです。

私はそれらのことから、基本的に1万年前ごろから日本には国があったのではないかと考えています。それまでは穏やかな、緩やかな家族連合であったことが予想されるわけですが、**遺跡が徐々に多くなっていく縄文中期には非常に人口が多くなってくる**ことが分かっており、そのことから7,000年前～5,000年前、三内丸山ができたのは5,500年前ですが、そのころにはすでに日高見国ができていたのではないと思われるわけです。

そのころは文字がありませんし、文字を必要ともしませんでした。これも大事なことで、当時の日本に文字がなかったことを、皆さんは「中国にはすでに文字があり、世界でもシュメールの文字があるのに、日本は遅れているのではないか」と考えるのですが、そういうことではないのです。

文字が誕生する以前には口承がまずあって、そ



れをお互いに記憶し合っていました。お互いに会うということには文字は必要ないのです。なぜなら、その人に会いに行けばいいわけで、それを記録する必要はないのです。それは信頼関係ができているからです。

例えば、今でも金銭の貸し借りを口頭で行っても、信頼関係がある人たちの間では問題がありません。文字を書くということは、つまり契約することですから、信頼関係の強いところではあまり必要がないのです。

そもそも日本は島国でどこにいるのかが分かりますから、信頼関係がありさえすれば逃げることができません。逃げることができないから、口で約束したものをお互いに守るということがずっと昔から行われてきたのです。

縄文の時代には戦争がほとんどありませんでしたが、それは、それだけの信頼関係、話し合いの世界、ゆずり合いの世界、そういうものがあったのだと思います。

その結果、記憶力のある人が語り部となり、お互い次々と話して伝えていくわけです。今でも家伝などを、もちろん書く人もいますが、ほとんどは親方が弟子に話を口で伝えているのです。

文字がなくてもきちんと国があり歴史があった

のは、日本がちょうどいい面積であったこともその理由であります。

私は縄文時代に日高見国があったということを強く主張しているのですが、そうでないと、なぜ三内丸山のような組織だった遺跡が出てきたのかを説明できないのです。

それから、いわゆる縄文時代の竪穴住居、つまり火を付けられればすぐに燃えてしまうような家が成り立つのは、やはり火を付けるような人がいないという、ある種の信頼社会があるからなのです。つまり、ある種の了解事項を中心的に作る誰かがいるわけです。「この人は信頼に値する人なのだ」という、信頼関係があるのです。

このことから、私は縄文時代の日本では何が重要だったのかというと、家族だと思うのです。家族が基本単位となり、1つの竪穴住居に住んでいました。

そして人間というのは1人で生まれるわけではないのですから、必ず親戚がいるのです。母親がいれば兄弟がいる、親がいる、そのような血縁関係が必ずあります。

それが連合してできたものが日本の国家というものですから、日本は国家という言葉に「家」という文字が含まれているのです。

これまでも繰り返し述べていますが、states (ステイツ) やnation (ネイション) にはfamily (ファミリー) が全く含まれていないのです。

ですから西洋の近代国家論というのはすべて間違いなのです。「家という単位が集まって国家というものをつくるのだ」ということを、日本が初めて言っているわけです。

今回は、皆さんに日本には最初の国があったということをお話ししましたが、次の時間では、具体的にどういう国家であったか、そしてどういう文化をつくっていったのかということをお話したいと思います。

どうもありがとうございました。



ダイレクト出版株式会社

〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町2丁目3-13 大阪国際ビルディング13F
TEL 06-6268-0850 FAX 06-6268-0851